Comment exprimer mes ... ?

松 本 陽 正

原野先生の知己を得て，もう30年になるだろうか。

先生にとってぼくとの出会いは，おそらく1975年に非常勤講師として広島大学文学部にご出講されたときのことだろう。当時，先生は広島女学院大学の助教授，ぼくは博士課程1年の学生だった。仏文は花盛り，先輩方は売れに売れ，先生の授業を受けた最上級生がぼくだった。

翌1976年，先生は広島大学文学部に助教授として着任された。3年間，古仏語を教わったが，仏文の後輩の島本君や言語学専攻の石岡氏の質問の意味がわからず，「何てバカなことを尋ねてるんだ」と一人ごちていると，先生が真剣に答えられるので，「ああ，いい質問だったんだ」と納得する，そんな不出来で不真面目な学生だった。2年目からは，なんとか質問の意味くらいは理解できるようになりはしたが，確かロマン・クルトワ関係のレポート課題だったにもかかわらず，鎌倉時代の女性の貞操観念についてだったか，とにかくトンチンカンなものを提出してすませた記憶がある。必死に生きず，もったいないことをしていたものである。

1980年より10年間，先生も関係の深かった広島女学院大学に勤務していた折は，非常勤講師としてご出講の先生とお会いし，短い時間ながら毎週お話を伺う機会がもてた。

夢想だにせぬことだったが，1990年に広島大学文学部に戻ってからは，小講座の助教授として8年間，大講座化以降は教授として7年間，ご指導を受けた。助教授時代は，先生が教室の雑務は一切引き受けてくださり，のんびり過ごさせていただいた。教授に昇任させていただいてからも，本質的にはあまり変りはなかった。教室主任を務めたのは最初の2年だけ，あとの5年間は先生にオンブにダッコ。『広島大学フランス文学研究』の編集もほとんど先生に任せっきり，というありさまだった。（今回のものも，先生が編集責任者であることに

変りはない。）そのうえ，2001年から2002年にかけては在外研究員として渡仏させていただいた。補佐すべき男が10ヶ月間海外逃亡するというのに，在研が決ったとき，笑顔で祝福していただいたことは今もはっきり覚えている。だが，帰国したときは，先生に手を握られ迎えられた。先生と握手したのは，後にも先にもこのときだけだが，ご迷惑をおかけした，としみじみ感じた。忘れ得ぬ瞬間となって胸に刻まれている。（余談ながら，ぼくを待ちわび，ぼくの手を握り迎えてくれた人がもう一人いる。女性だが，それは細君ではなく，内気だとばかり思っていたが，「せんせ〜い！」と両の手でぼくの手を強く強く握り締めてきた近所の酒屋の奥さん。）

プライベートな面でも，たとえば，パソコンでの入力方法が分らなかったときなど，「先生，すみませ〜ん」と先生のお仕事を中断させ，どれだけ先生を煩わせたことだろう。そんなとき，先生は嫌な顔もせず，「ハイ，ハイ」と助けてくださった。

学生に対しても同様だった。日々の時間がさぞかし貴重なものだったろうと拝察するが，先生の研究室のドアはいつも開け放たれていた。学生が遠慮せず，気軽に入って来られるよう，そうされていたのだ。

このたび，無事ご定年をお迎えになる先生には心からお慶びを申しあげたい。だが，同時に，バックボーンを失う思いにとらわれてもいる。（ですが，先生，なんとかやって参ります，ご心配されませぬよう。）

先生のお仕事については，説明は不要だろう。業績一覧を一瞥いただくだけで十分だろう。それでも，あえて一言。日本人の物書きなら「岩波文庫」から，フランス人の物書きなら「リーヴル・ドゥ・ポッシュ」からの出版を誰しも夢みるのではないだろうか。ところで，先生はこの両方を実現されている。たとえて言えば，世界選手権とオリンピック連覇といった比ではなく，夏と冬のオリンピック金メダル受賞の離れ業，といったところだろうか。

どうしてこれだけのお仕事がおできになるのだろう？　先生は読むのも書くのも，とにかく速い。雑事などは，サッサッサッのサッである。だが，もちろん，それだけではない。ぼくが垣間見た光景から，秘密の一端が窺えるかもしれない。

先生の知己を得たのは1975年ではないか，と冒頭に書いた。だが，ぼくが初めて先生にお会いしたのは，もう少し前，1973年冬，松山商科大学（現在の松

山大学）で中国・四国支部大会があった日だ。大会終了後，広島経済大学の清家さん，高知女子大の山口さんと松山駅前の食堂で一杯ひっかけた。ぼくの見知らぬ人が一人同席していた。それが先生だった。八幡浜に帰省する清家さん，高知に帰る山口さんとは駅で別れた。先生とは同じバスで松山観光港に向かったのだろうか？　それは覚えてはいない。ぼくは — 想像はつくとは思うが — フェリーの中でさらにビールを飲み，座敷に寝そべり，時を過ごした。所在なさに船内をブラブラ歩いていて，驚いた。先ほどまでご一緒していた方が，長椅子に腰をおろし，本を読んでいるではないか！しかも，覗き見れば，原書。「こりゃすごい！」と思った。これがぼくにとっての先生の第一印象である。

先生に主査を務めていただいた博士論文を上梓した折，「あとがき」に記したことだが，研究者の端くれであるぼくにとって，先生は「タルー」(『ペスト』の作中人物）だった。常にぼくに — 否，ぼくに対してだけではない — 機会を提供してくださった。先生に機会を提供していただかなかったなら，「端くれ」にすらなれなかったことだろう。今年の夏の「広島大学フランス文学研究会」では，小出しに発表していたものをまとめるかたちで口頭発表したにもかかわらず，発表直後に先生から，「面白かったです。博士論文がもう一つ書けますね」との言葉をかけていただいた。これからのぼくを支えてくれることだろう。

先生にエスプリ・クルトワが溢れていることは重々承知のうえで，僭越ながらあえて述べさせていただくなら，先生は，エスプリ・クルトワよりもむしろエスプリ・ゴーロワの人だと思う。複雑な人間関係をエスプリ・クルトワで乗り越えてこられたが，これからは，あのコンパや花見の折に覗かせられたエスプリ・ゴーロワで，豪放磊落，悠悠自適，執筆三昧の日々をお過ごしいただきたい。そして，日々の散歩と週末の — これからは毎日されるのだろうか？ — 水泳を励行され，いつまでもお元気にお過ごしいただきたい，そう願っている。

先生への敬意と感謝の念を少しでも表すべく，ご退職記念論集の出版をと考え，2年近く前に後輩の一人に相談したことがある。ところが，後輩の返事は，「松本さん，できますか？」なるもの。先生の謦咳に接した大学院修了者のリストを眺めてみたが，確かに，先生に捧げるに足る論文集は無理だな，と感じた。やむなく，先生のご了解を得て，『広島大学フランス文学研究 24』を記念号とさせていただくこととした。ところが，ふたを開けてみると，先生のお人柄で

あろう，先生を知る多くの方々からのご寄稿があった。「こんなことなら立派な本になってたよなぁ」と一人悔やんだが，創刊号から先生が深くかかわってこられた，先生にとっておそらくは最も愛着のある雑誌，ということでお許しいただけるのでは，と密かに自分を慰めている。勝手なものである。